

# 赤風

★123号

農地奪還飛行阻止  
7★4二回場へ

82.6.10  
京大三回場  
斗争委員会

統線  
2722  
6539

# 二期工事 やれるものならやっておろ 斗うわしらは負けんが

6月6日、横堀の地にある皇憲公園用地は、反対同盟の耕作ヘクタールが終わり、畑を反対同盟農友と支援 28名の力により3ヘクタール(3町歩)の美しい落花生畑に変えられた。反対同盟自身のきによる農地奪還の斗いの二回作付がいよいよ始まった。

主役—反対同盟がンバルは  
草取りに本領発揮

5日の肥料まきに引き続き6日の作付作業には皇憲園や京都をはじめとした関西の支援が多数かけつけ、反対同盟も知名度が顔をそろえ28人の大部隊で公園用地に進出した。反対同盟は、この農地奪還の斗いにおいて、

5月29日の反対同盟実行委員会が耕作委員会(仮称)を総括し委員の名を選出し体制を整えた。6日当日は、専ら局長長官会を中心が図面を持ってまわり、耕作委員長兼田一さんは、カマを手に機械化部隊(トラクタ、ウエ)を指揮し作業はみるみるうちに進む。28人が一斉にセイタカアワダチソウを引っこぬき、根っこの一つつまみと拾い集める。そしてアタのトラクターで耕し、マルチを張る。また28人が一斉に一粒づつ心をこめて落花生の種をまきとる。午後三時には

反対同盟の耕作ヘクタールが終わり、畑を前に合宿所の前庭で祝宴がひらかれた。更に6時下は、横堀部若反日同盟の耕作ヘクタールが終わり、二回目の祝宴が深夜まで続いた。僕たちの公園用地耕作自主耕作の斗いは82年、反対同盟の農地奪還の斗いへと

発展した

70年、皇憲公園は、横堀の(公園かい)不法耕作を封じる為に強力防衛軍がロシル本を撤布した。横堀の防衛軍のまわり数ヘクタールは、数年にわたって奪還をほさない荒地地となった。

我々は、空襲の歴史を歴史を許さない飛行阻止斗争、実力斗争を担いつつ、同時に「公園用地を自力で奪い返す」斗いを開始した。82年12月、公園用地に残された木のせいでいよいよ我々は一貫して横堀部若の農地奪還、自主耕作の斗いの先頭に立ちつぎた。79年春、二期工事指定内の水田4区、の耕作を開始。そして、80年以降は農友指原に集つた他の支援グループと共にこの荒地に鉄をいれ、3区あまりの畑を耕作してきた。この春も、田植を行い、ジャガイモ

の作付を行った。  
今回の反対同盟を主体とした横堀の規模本農地奪還斗争の展開は、二期工事を具体的な現地的に阻止する闘争をつくる為に行ってきた我々の自主耕作の種が芽生えたものも言える。

豊かた地に実力耕作を展開し、奪われた村をとりもつて農家を創出しつつ

横堀部若は、二期用地内に接しており、今後二期工事をめぐる情勢が正念場をむかえた時、まっ先に戦場になることが必至の場所である。昨秋以来の横堀拠点化、やぐら建設、

農地奪還の斗いは、斗う村を再建し、敵を我らから根にひきずり出さうという攻撃である。それ故、政府、公園にとっては容認できぬ運動であり、今回の畑をめぐる攻防は激しくなるであろう。

6月6日、敵権方は、我々の大部隊の前に指一本動かさなかったが、この畑を我々が日常的に管理し拡大してゆかねばならぬ。何より大地は耕す人のものである。この大地を「コソコソ」でおおいつぶして奪還の策略を断念せねばならぬ。

6日の農地奪還の力をもって、7日4日たは眞摯的攻撃をかける。6月19日、カオルをめぐる日々、午後6時より村立労働会館

6月19日、カオルをめぐる日々、午後6時より村立労働会館